

校内別室での生徒支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生であり、入学時には通常通り登校していたが徐々に欠席が増え、S C や担任と相談を継続する中で、別室登校を続けることになった。保護者は当該生徒の意思を尊重し、生徒の S C 面談、保護者の S C 面談など積極的かつ継続的に関わっている。

具体的な取組

○別室での指導

欠席理由の一つとして、学校生活やクラスでの学習への漠然とした不安があった。別室登校で、自分の目標にあった学習が進められ、S C 面談が継続的にできたこと、給食で自分の教室に配膳に行けるように担任や学年の教員が環境を整えたことで、当該生徒の安心につながった。

○生徒に応じた支援方法①

教室での授業ではなく、当該生徒のペースや探究心を大切にして支援している。担任や学年教員のアドバイスを基に、別室で自分の目標を設定し学習を進めた。また、日誌（振り返りノート）を利用したことで、安定して別室登校できた。

○校内委員会での情報共有

定期的に部会を開催している。校長、副校長、不登校コーディネーター、養護教諭、S C、S S W、特別支援教員が参加し、不登校生徒について情報交換を行い、支援方法や支援方針についての話し合いを行い、組織的な対応を心かけている。

○生徒に応じた支援方法②

当該校は、毎日、別室を開室しており、1 週間継続して利用することができるメリットがある。さらに、教科のアドバイスができる支援員、S C、S S W が支援しているため、メリハリのある生活ができる。

成果

平日は別室の開室（支援員の勤務）があり、希望生徒が利用しやすい環境を整えることができ、当該生徒以外にも、継続して学習している。



課題

当該生徒が在籍学級との関係づくりを卒業に向けて進めることが課題である。

校内別室での支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生であり、1 学期後半から不登校状態が継続している。要因は、明確ではないが、学習や、仲間とのコミュニケーションに対する不安が考えられる。今年度 9 月から、別室登校を行っている。意欲的に取り組み、家庭の事情以外はほぼ別室登校できている。

具体的な取組

○別室登校への支援

担任の紹介で別室指導を開始した。学習に対する姿勢が前向きであり、事前に担任と情報共有、保護者を交えた別室での支援の説明を丁寧に行った。学年教員や教科担当の教員と授業内容、給食指導を連携しながら進めた。

○生徒に応じた支援方法①

当該生徒は、小学校 4 年生の 3 学期に欠席が増えはじめ、その後不登校傾向が強くなった。穏やかな性格で友人トラブルはなかったが、「学校に行くと疲れる」と話していた。疲れる原因の一つは学習への不安と考え、当該生徒に学習の目標を設定した。

○校内委員会での情報共有

週 1 回定期的に会議を開催している。校長・副校長も出席し、特別支援教室、養護教諭、SC、SSW、各学年担当が参加し、生徒の情報交換を通して、支援方法や支援方針についての話し合いを行い、組織的な対応を心がけている。

○生徒に応じた支援方法②

当該生徒は、数学（算数・割り算）の克服を目標に挙げ、ベーシックドリルを中心に小学校の内容と中学校 1 年生の内容を組み合わせて取り組むようにした。別室の支援員や SSW と連携し、当該生徒のペースを考えながらスモールステップで支援した。

成果

当該生徒は安定して別室登校し意欲的に学習に取り組んでいる。考査にも目標をもって臨むことができた。



課題

進級に向けて、当該生徒と相談して、仲間とのコミュニケーションの仕方、行事参加などの目標を考えさせていく。

教育支援センター等関係機関との連携による生徒支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生で、小学校 1 年生から不登校状態が継続している。要因として、給食を無理に食べさせられたことがトラウマになり、学校を拒絶するようになっていた。小学校では早くから教育支援センター、子ども家庭支援センター等と連携し家庭訪問、支援会議を続けてきた。現在、学びの場を幅広く捉え、支援中である。

具体的な取組

○教育支援センター等での指導

継続的な働きかけの中で、小学校 5 年生の時に教育支援センター通所に興味を示す。6 年生で教育相談室への通室が始まる。中学校 1 年生で、校内別室と教育支援センターの体験が始まる。教育支援センターへの通所がやや安定した形となり、学習への意欲が見え始める。

○生徒に応じた支援方法①

当該生徒は当初から子ども家庭支援センター等が継続し支援してきた。学習の積み重ねや友人間のコミュニケーションも得意とは言えず、各担当が当該生徒の支援についてケース会議を開きながら検討し家庭との信頼関係を構築してきた。

○校内委員会での情報共有

定期的に会議を開催している。校長・副校長も出席し、生活指導主任、不登校コーディネーター（養護教諭）、SC、SSW も加わり、不登校生徒や支援の必要な生徒の情報交換、方針について組織的な対応を行っている。

○生徒に応じた支援方法②

当該生徒が在籍校の別室に体験に訪れた際、担当教員が利用の説明をした。しかし、登校へのハードルがあり、継続できていない。信頼関係のある子ども家庭支援センターの担当と一緒に教育支援センターへ安定して通所できている。また、学習支援員が地域の公共施設で週 1 回学習指導を行っている。

成果

様々な支援が功を奏し、学習や集団での生活に少しずつ取り組むようになった。また、家庭との信頼関係が強くなった。教室ではないが、別室や保健室に登校できた。



課題

進級、将来について、当該生徒の特性や希望を一層把握していく必要がある。そのために、これまでの支援の継続が最重要である。